

「良い子になれない私でも」

幼稚園での働きをさせてもらっている中で、他の私立の幼稚園や認定こども園にお邪魔する機会も増えてきました。そこで感じるのは、私立の園って、本当、千差万別だな、ということです。保育理念も違えば、業務体系も違うし、「子どもを受け入れる」という 1 点だけが共通している以外は、ほとんどすべて違うことしているんだな、って言っても良いくらいに、違っていると感じます。

例えば、お昼ご飯の提供について。幼稚園みたいな集団生活の中では、みんなが同じ時間に食べるのは当たり前だと思っていましたが、「いや、うちの園は、子ども達が好きな時に給食食べるんですよ。うちは配慮の必要な子が多くて、そんな子どもがイヤイヤ給食食べさせられて、1 日気分悪く過ごすくらいなら、好きな時にご飯食べて、気分良く過ごせる方がいいかなって思って」と仰る園長先生がいました。あと、「うちの園は学年担任が 4 人いるんですよ。1 学年 2 クラスを 4 人の担任の先生で見てて、保護者はこの 4 人の先生の誰に尋ねても、ちゃんと自分の子どものことを聞けるようにしています」とか。その園の保育理念によって、その園長先生の考え方によって、たかさんの「園の営み方」があるということを知れました。

そんな風に、色々と見学させてもらう中で、「良い子」という概念と言いますか、理想像についても、きっと千差万別なんだろうな、と思うようになりました。保育・教育方針の中に、「良い子になる」ことを掲げている園さんは少なくありません。「私たち良い子になります、〇〇幼稚園の子どもとして」という標語を掲げているところもありました。「良い子」は、もちろん、「良い子」なわけですから、非常に望ましいことです。けれど思うのは、その「良い子」というのが、「大人にとって都合の良い子」であるなら、それって、ちょっと悲しいことだなと。一個の命ある生き物と

して、世代間で支え合う社会的存在として、子どもが生まれなければ、私たち大人の生活や社会はいずれ行き詰まるという実情は承知の上で、でも、別に子どもは大人のために生まれてくるわけはありません。子どもは、自分という存在を発揮し、全うするために生まれてきます。だから、「良い子」は「良い子」でも、「大人にとって都合の良い子」というのは、これは不幸なことです。

また、大人同士の関係においても、新人や若年者を指して「うちに配属された新しい子はさ」という感じで、成人した社会人に対しても「子」という言葉を使うことがあります。そして、その「新しい子」が良いとか悪いとか評価・採点することは珍しいことではありません。社会人は、その名の通り、社会に生きる人ですから、その社会における役割を負わなければなりません。役割を負う以上、品定めされ、値踏みされることは、まあ、仕方ないでしょう。牧師だって、神様からの信託だけでなく、人間的な判断基準に照らされて牧会現場に遣わされていきます。役員にしても、選挙という形で比較・吟味され、その重役を任されていきます。この社会に生きる以上、程度の差はあれ、「都合の良い子」であることは、逃れられないことです。「都合の良い子」は信頼され、仕事を任され、生産性があるからです。

でも、我々キリスト者は、そういう「都合の良い子」の呪縛、強制から、少しでも自由でありたいと思います。そもそも私たちは、「都合の良い子」だから、ここにいるわけではありません。人様の迷惑にならないように、教会に少しでも貢献できるように、「都合の良い子」になろうという努力は大切ですが、私も牧師として、園長として「都合の良い子」であろうと努めていますが、でも、そんな努力と神様の救いに与ること、神様に愛されることとは全く関係のないことです。先週の子どもと大人の合同礼拝で歌った讃美歌ですが、こどもさんびか 58 番の 3 節には、今日の説教題と同じ歌詞が入っています。「良い子になれない私でも、神様は愛してくださるってイエスさまのお言葉」。これ、私の好きな歌詞です。神様にとっては、人間的価値観における「都合の良い子」

ではない子どもも大人も、みんな愛すべき子だということです。たとえ正真正銘の「良い子」じゃなくたって、他の人や、大人にとって「都合の良い子」じゃなくたって、神様は私たちのことを愛してくださる。奉仕ができようができまいが、立派なことを喋れようが喋れまいが、多くの献金を捧げられようが捧げられまいが、そんなことは関係ない。人間的価値観で、神様は私たちのことを評価・採点されたり、絶対なさいません。絶対にそんなこと、神様はしないのです。

しかし一方で、私たち人間はどうでしょうか。私たち人間はどうしたって、人間的価値観で人を評価・採点してしまいます。私が幼稚園でしている先生の採用面接試験とか、まさにその典型ですよ。だから、私も大きなことは言えません。罪深い一人だと思っています。ただ、そんな罪深い私のことを支えてくださっているのも神様なんですよ。私という人間は、今日のイエス様の言葉を借りるなら、「医者が必要としている病人」です。昨日の福井地区婦人研修会で講師をされた畑雅乃先生も仰ってましたが、「牧師だって人間だから弱さを抱えている」ということは、まあ、間違いなくその通りで、むしろ、牧師だから病に近く、罪と弱さを深めているということもあり得るでしょう。神様は分け隔てなさらず、全ての人を受け止めて愛してくださるのに、その神様のことを宣べ伝える牧師は、教会という組織の中で、時に人を責め、時に人を叱り、時に洗礼という恵みの御業の許認可権を振るう立場に居座ります。園長ともなれば、完全に人間的価値観で人を評価・採点しなければなりません。本当は、そんな権限は人間にはない、と心で思い、こうやって説教で語りつつです。それって、とても病んでいるし、罪深いことだと私は思っています。

だからこそ、今日の聖書箇所は、私にとって嬉しいです。イエス様は、健康で丈夫で、正しくて非の打ち所がない人のところではなく、罪を罪として知りながら、そこから離れることができず、反省と謝罪を繰り返すような人のところに来てくださったのです。色々な意味で病んだ状態の人のところに、イエス様はやってきて、「一緒にご飯食べよう」って言うてくれるのです。

そして、そんなイエス様によって愛され、祝福され、招かれ、キリストの肢となった私たちは、やっぱり「良い子」じゃない人も、「都合の良い子」じゃない人も、受け入れるようと努めないといけないと思います。私たちは、褒めるところではなく、注意し、叱るところが多い人こそ、受け入れて、交流を持つことを心がけたい。実学実利が幅を利かせ、人にとって、社会にとって、「都合の良い子」が重宝がられる、この余裕を失った現代だからこそ、教会は、今日の聖書箇所でお言葉を語るイエス様のように。胸を張って「正しい人ではなく罪人を招くのだ」という心意気を忘れないでいたいと思います。「立派じゃなくていい、優秀じゃなくていい、ありのままで神様に愛されている、あなたに出会えて良かった」と、そう誰に対しても言える信仰者であり、教会でありたいと思います。

何かにつけて、線引きをし、部類分けして不公平感の少ない社会制度にしようとして、結局、分断を促し、喧々諤々紛糾する世知辛い世の中です。せめて教会に来たら、まあ、悩みが霧の晴れるように丸っと解決することはないにしても、「なんか落ち着く」という、そんな安らぎを感じられる場所にしていきたいと思います。この説教で何度も言うように、ここ教会は天の国の先取りなわけですから、誰もが安心して、憩える場所にしていきましょう。「良い子になれない私でも」、イエス様に隣に来たら、神様のもとに来たら、教会に来たならば、ちょっと元気が出て、次の1週間もなんか頑張れそうだ、そんな小さな恵みに触れることができますように。祈りたいと思います。

神様。

なんの功もない私たちを、こうして恵みの礼拝に招いてくださり、心から感謝致します。あなたは、私たちを分け隔てなく愛し、その愛に応えた一人一人を差別なく、区別なく、こうして招いてくださいます。あなたの愛の大きさに比べたら、私たちが日々行う親切や配慮など、小さな働きに過ぎないのかも知れません。けれど、神様、私たちも出来る限り、あなたの愛に倣おうとして、主の道を歩むことを励んでいます。そんな私たち一人一人の信仰の歩み、奉仕の働きを強め、お支えください。あなたによって、ありのままを愛された一人として、この祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

11月召天者を憶える祈り

聖書：エフェソの信徒への手紙 1章 11～14節

キリストにおいてわたしたちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者とされました。それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです。あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。

中野機策兄 なかの きさく けい (2005年11月1日召天)

高島梅野姉 たかしま うめの し (1967年11月7日召天)

杉原 保姉 すぎはら やす し (2004年11月8日召天)

岡本幸枝姉 おかもと さちえ し (2000年11月11日召天)

長谷川寿み姉 はせがわ すみ し (1964年11月16日召天)

中山直枝姉 なかやま なおえ し (1983年11月19日召天)

吉田次子姉 よしだ つぎこ し (1989年11月25日召天)

松木重秋兄 まつき しげあき けい (1944年11月25日召天)

中村與吉兄 なかむら よきち けい (1999年11月26日召天)

細井花子姉 ほそい はなこ し (2020年11月30日召天)

神様。

秋も深まり、収穫感謝やアドベント、クリスマスへの備えも始まるこの季節。私たちは11月にあなたの御下へと召された信仰の先達を憶えて祈りを捧げています。1年の一巡りの中に、あなたは春夏秋冬を定められたように、人の一生にも様々な季節を定められました。順風の時、逆風の時、幸せな時、不幸な時、喜びの時、悲しみの時。今、名前を読み上げ心に留めている11月の召天者の方々も、そんな色鮮やかな人生を全うされ、走り終え、あなたの御下へと旅立たれました。どうか、先に召されし敬愛すべき兄弟姉妹の、その人生の喜怒哀楽をあなたが御心に留め、永久の平安と祝福で満たしてください。そして、未だ地上での歩み続ける私たち一人一人に、豊かな慰めと、進むべき道標をお与えください。天にあっても、地にあっても、あなたと共なる恵みに与れますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。